パネルディスカッション概要

令和 6 年度「かながわクリーンアクティブ・オンラインフォーラム」

開催日時　2025 年 1 月 29 日（水曜日）15 時 15 分～17 時

開催方法　Zoom によるオンライン開催

テーマ 1　マイクロプラスチック問題について

- 皆様の活動の中で、どのようなプラスチックごみが多いでしょうか。どうすればプラスチックごみを無くしていけると考えられるでしょうか。
- また、マイクロプラスチック問題について、どのような課題があるとお考えでしょうか。

美化財団：日常的に使用されるごみ、空き缶、ペットボトル、食品の容器の包装などをよく見ます。細かいマイクロプラスチックになってしまうと、本当に膝をつきながら一個ずつ取っていく作業になってしまう。ごみの発生源というのは私たちの身近なところから発生しているので、確実に決められたところにごみを捨てること、ビーチクリーンを続けていくことが大切かなと思います。

流域協議会：内陸の方は、非常に発泡スチロールが多いです。ブルーシート、農業用のマルチシートも多いです。最近はカップ飲料の空きカップが非常に多く増えています。どれもやはり私たちの生活の中から出てきているものです。私たちはごみを分別するだけではなく、もっと使う量を減らして、必要のない過剰なプラスチックは使わないようにしようと思います。

海さくら：20 年前はペットボトルとか大きいごみがたくさんありました。ごみ拾いをする人が増えたことで大きいごみは見当たらないのかもしれませんが、膝をつけば海岸はプラスチックだらけです。神奈川県は美化財団がごみを回収するので持ち帰らなくてもいい、最初の一歩の踏み出しは最高にいいわけですよ、拾う楽しさがある。だけど 20 年もやってますと、自分たちで拾ったごみを仕分けをして焼却場まで持っていくという最後の過程までをやる必要があるんじゃないかと思っています。バリ島にごみの研修で行きましたが、一日でこんなに川に溜まってるんだというのを実感しました。焼却場に行くといろんなごみがある、リサイクルセンターに行ったらペットボトルのラベルをはがしたりしている、誰かがそれをやってくれてるんだと実感したり。豆腐屋さんにタッ

パーに持っていって豆腐を入れてもらうような、昔に戻る政策も必要ではないかと思いました。

JAMSTEC：まずおさらいとして、マイクロプラスチックの定義は 5mm 以下、1 μm 以上です。研究で 100 μm よりも小さいものが圧倒的に多いということが分かってきました。特に海中で、最近の調査によると水深が深い 1,000m、2,000m というところで小さいものがものすごく多い。マイクロプラスチックがどういった生物影響があるか世界中で調べられている。しかし、実験室で 100 μm 以下の何 10 μm とか、あるいはナノメートルスケールの、すごく小さいサイズのマイクロプラスチックを生き物に与えて影響を調べている研究がほとんど。一方で海の現場では、そんな小さなサイズのマイクロプラスチックはほとんど測れていない。だから、海で調べているマイクロプラスチックの量が海の生き物に影響があるのかは、実験室レベルと照合ができていない。このギャップを埋めることが課題の一つとなっています。

県：県の環境科学センターでも調査しており、内陸部から河川を通して流れ出ている可能性が非常に高いことは推定されています。発生源についても、ごみ集積場などのいわゆる散乱ごみのようなもののほかに、人工芝や三角コーンなど屋外で使用しているプラスチックに由来するものもあるということが推測されています。プラごみ自体を減らすということも大事ですし、ごみを減らす、ごみを流出させないことも重要ですが、使用中のプラ製品の適正な管理も必要だということを広く発信していきたいと考えています。

テーマ 2　内陸部への海ごみ問題の普及啓発について

- 県では令和 6 年 3 月に改定した「神奈川県海岸漂着物対策地域計画」において、内陸部の市町村等の役割を明確化し、内陸部と沿岸域が一体となった発生抑制対策を推進することなどを追加しました。
- 内陸部への意識づけや海ごみ問題の普及啓発としてどのようなことができるでしょうか。皆様からアイデアをいただいたいと思います。

美化財団：当財団の取り組みとして、内陸部の小学校の方に出向いて海ごみについて学ぶ学校キャラバンを行っています。海岸ごみの約 7 割は川から流れてくる、ごみの発生源は私たちの日常の生活から出ているので、より身近に自分事として能動的に考えてもらうために取り組んでいます。

流域協議会：出前講座など啓発活動も進めています。成果事例として、山梨県内の支流で住民参加による清掃活動した際に、住民の方たちに自分たちでごみの分別をしてもらいました。その体験以降、その支流からの流れ込みがなくなりました。もう 3 年も流れ込みがないです。それだけ体験することと、見える化することは大切なことだと思っています。

海さくら：内陸部から海にごみが行くということがまだまだ全然知れ渡っていないというのが大きくあると思います。それを徹底的に言ってもらいたいなと。一般の方たちは排水溝であったり川回りって言ったところのイメージがつかないと思うんです。先ほど美化財団の発表で排水溝に入って、そこの蓋を開けて川に行くという下水道の仕組みがありましたが、なんで街と川と海が繋がっているのか、原因が分からないから街のごみが海に行き続ける。我々の「あなたの心が流れる先に」の映像や海洋戦士シーセーバーを観てもらうのも良いですが、一番は一回でもごみを拾ってもらうところをきっかけにして自分で体験、体感してもらうのがいいと思っています。川と海と街が繋がっている、ごみが流れてきていると分かったとしても、なんとなく川回りから流れてきてるんでしょう、自分は関係ないと思われている。もうちょっと具体的に、排水溝が海の入り口とか言わない限り、海は綺麗にならないと思います。

JAMSTEC：海の中のプラスチックは見えなくなりますが、人は見えないと気にならないんですね。それを見えるようにして、例えば私たち研究者だったら、プラスチックの地図を作って、プラスチックがどこにどれくらいあるのか、きちんと見える化する。それが世界中の人、内陸部の人も含めてプラスチック問題の啓発や政策の効率的な策定に繋がると考えています。

県：内陸部では普段の生活で海ごみを意識する機会が少ないというのが現状のようです。内陸部への普及啓発は一つのキーポイントだと思っています。県の方でも引き続き SNS 等を活用した周知とともに、内陸と沿岸域が一体となった取組みを進めていきたいなと考えているところです。